

にひきのかえる

にいみ なんきち
新美 南吉

みどりの かえると きいろの かえるが、はたけの ま
んなかで ぼったり ゆきあいました。

「やあ、きみは きいろだね。きたない いろだ。」
と みどりの かえるが いいました。

「きみは みどりだね。きみは じぶんを うつくしいと
おもって いるのかね。」
と きいろの かえるが いいました。

こんな ふうにはなしあって いると、よい ことは
おこりません。

二ひきの かえるは、とうとう けんかを はじめました。

みどりの かえるは、きいろの かえるの うえに とび
かかって いきました。この かえるは、とびかかるのが と
くいで ありました。

きいろの かえるは、あとあしで すなを けとばしまし
たので、あいては たびたび めだまから すなを はらわ
ねば なりませんでした。

すると その とき、さむい かぜが ふいて きました。
二ひきの かえるは、もうすぐ ふゆの やって くる
ことを おもいだしました。 かえるたちは、つちの なか
にもぐって、さむい ふゆを こさねば ならないのです。

「はるに なったら、この けんかの
しょうぶを つける。」

と いった、みどりの かえるは つちに もぐりました。

「いま いった ことを わすれるな。」

と いった、きいろの かえるも もぐりこみました。

さむい ふゆが やって きました。かえるたちの もぐ

って いる つちの うえに、 びゅうびゅうと きたかぜ

が ふいたり、しもばしらが たったり しました。

そして それから、はるが めぐって きました。つちの

なかに ねむって いた かえるたちは、せなかの うえの

つちが あたたかく なって きたので わかりました。

さいしよに、みどりの かえるが めを さましました。

つちの うえに でて みました。まだ ほかの かえるは

でて いません。

「おいおい、おきたまえ。もう はるだぞ。」

と、つちの なかに むかって よびました。

すると、きいろの かえるが、

「やれやれ、はるに なったか。」

と いった、つちから でて きました。

「きよねんの けんか、わすれたか。」

と みどりの かえるが いいました。

「さて さて。からだの つちを あるいはおとしてからに
しようぜ。」

と きいろの かえるが いいました。

二ひきの かえるは、からだの だろつちを おとすため

に、いけの ほうに いきました。

いけには、あたらしく わきでて、ラムネのように すが

すがしい みずが、いっぱい たたえられて ありました。

その なかへ、かえるたちは、とぶん とぶんと とびこ

みました。

からだを あらってから、みどりの かえるが めをば
ちくりさせて、

「やあ、きみの きいろは うつくしい。」

と いいました。

「そう いえば、きみの みどりだって すばらしいよ。」

と きいろの かえるが いいました。

そこで 二ひきの かえるは、

「もう けんかは よそう。」

と いいあいました。

よく ねむった あとでは、にんげんでも かえるでも、

きげんが よく なる もので あります。

「二ひきのかえる」

※このテキストを個人的に読以外の利用をされる場合には、
新美南吉記念館までご連絡ください。

(TEL : 0569-26-4888)